優しい殺し屋と魔女。

Dm7

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
優しい殺し屋と魔女。

【Ｎコード】
Ｎ５８２５Ｃ

【作者名】
Ｄｍ７

【あらすじ】
職業、殺し屋。マフィアに所属していた彼は、任務の途中に、気を失う。……そして目覚めた所は――なんと、魔法の存在する世界だった！？魔女に召喚された、人を殺す事自体には躊躇いの無い殺人機械は、人を傷付ける事を望まない優しい殺し屋だった。そんな彼が引き起こすドタバタ恋愛？コメディー。

壱話。

さくり、と手元の感触が心地良い。
撃鉄を引く瞬間が、丁度良い緊張を与えてくれる。
人を殺すのは別にどうとも思わない。
機械的に、何も考えずにアクションを起こす。
俺はそう言う血塗れの世界に育った。

なのに……。

◇　◇　◇

「もう一度問う。ここはどこだ？」

頭の中の疑問を出来る限り解消しようと、俺は必死に眼の前の少女に語りかけた。

「こ、ここはスノウ・ベルン中級魔術学校で、ですぅ……」

この女はふざけているのか？　それとも、俺は気絶しているうちに精神病棟に入れられたのか？

「ほう、そうか。仮にそうだとしよう。なら何故俺がここにいる？」

辺りは薄暗い。小さな部屋に灯りが一つきりだ。

「そ、それはー……えっと、その……ゅう、だからです……」

……声が小さくて聞こえない。

「聞こえない。もう一度、言え」

「あ、あの。だからっ！　あなたは私に召喚された召喚獣なんですっ！」

ハ、イ？

嗚呼、そうか。世の中には薬のやり過ぎで頭が狂ったと言う奴がいるが、こう言う奴の事を指していたのか。哀れな奴もいるもんだな、と他人面していたが。俺にまで被害が及んだか。

「あ、あの？　何処に？」
「無論、帰る」
「え？　あの、帰れませんよ？　あなたは今日から……」
「俺は、か・え・る。理解できたか嬢ちゃん？」

顔を間近に近づけ、獣殺しの殺気で睨み付ける。

「生憎、俺には仕事が残っていてな。お遊びに付き合ってるほど暇じゃないんだ」

俺に、少女は泣きそうになりながらこう言った。

「……エルナ・セルロウ・ヴェルロット。こ、これがあなたのご主人の名前よ……覚えて起きなさい……です……」

主人と言うなら敬語を使うな。

「そうか、で。エルナ、出口は何処だ？　と言うかここは何州だ？」

俺がいたのがニューヨークだった筈だが……日本に帰って、早く和食が喰いたいものだ。

「なにしゅう？　ここはスノウ・ベルン王国ですよ？」

また、それか……。いい加減にしてくれ。そう、言おうとした時。
ギギッと古めかしい音を立てて、俺の真後ろにあったらしき扉が開いた。

「終りましたか？　ミス・ヴェルロット」

五十台過ぎのばあさんだ。
ちろりと、俺の方を見やる。なんだ？　何様だ？
かなり驚いた顔をしている。失礼だな。

俺はこの時、初めて少女の顔をはっきり見た。
十四〜十五あたりか？　整った顔立ちに、黒……いや、深い紺色の髪をしている。
鼻の辺りにちょこんと紅い眼鏡が乗っている。左右の目の色が違うな？　黒と紫紺？
真っ黒なローブを着ている『ご主人様』をジロジロと観察していると、目をそむけられた。

「ミス・ヴェルロット？　説明をお願い」

ばあさん、俺にも説明をお願い。

「え、えと。ミセス・グラリス、召喚の儀式を行ったらこんな人に酷似したのが……」

待て、俺は立派？　な人だ。

「とりあえず、後が痞えています。学園長の所へ報告しに行きなさい」

「待て、ばあさん。一つ言う、あんた等は纏めてココがおかしいのか？」

自分の頭を指で指しながら問う。

「な！　獣魔が喋った？」

人が人の言語を理解しちゃいけないのかい。

「ミス・ヴェルロット、今すぐ学園長の元へ。この獣魔を見て貰いなさい」

俺の言葉は無視ですか、そうですか。

流石に俺もお遊びにずっと構ってるほどお人好しじゃあない。

腰に吊ってある、拳銃……にしてはデカめだが、それを引き抜き少女の頭に押し付ける。
周りはシーンッと静まり返っている。

「あの？　なんですかこれ？」

嗚呼、おかしいな。本当に頭がおかしいらしい。
拳銃を付き付けた挙句に「これ？　なんですか？」

「ふざけるなぁぁあっっ！」

俺はその瞬間から膝を抱えて、持病の鬱と闘っていた。

弐話。

生まれは日本。
親が死んで、ヤクザに拉致られて、売られて。マフィアの親父から、殺し屋の訓練受けさせられて。さて、そろそろ彼女でも見つけようかって時に。
連れてこられたのは、魔法なんとか学校ですか。
君はハ〇ー・ポ〇ターに憧れてた、それだけだよねっ？

そう言う視線を込めて足元をチョコチョコ歩く少女を見る。
今、俺は召喚獣専用魔法、「束縛縛呪」と言うたいそうなものを掛けられながら移動中だ。
魔法はいたってシンプル。縄で亀〇縛り。しかも、首から出てる縄を少女が持ってる。

「コレじゃあ犬だろ」
「に、似たような物です」
「酷いな」
「な、これが当たり前なんですからっ」
「嗚呼、そう。俺の人権なんてどうでも言い訳ね」
「あぅっ……」

顔を真っ赤に染め上げた彼女はなかなか可愛らしかった。だが、俺は今理不尽な状況下にいる。いや、むしろ常人なら理不尽どころでは済まないだろう。
……あー。昔、仕事で組んだ仲間に「魔法使い」なんて二つ名の奴

がいたなぁ。

「つ、着きましたよう」

おどおどと話しかけるな。なんかこっちが悪いみたいじゃないか。

「はいはい。早く案内してくれ」

ここは素っ気無く対応。

「いきますよ。……失礼しますっ！」

ノックを盛大に鳴らして、勢い良く扉を開け……て足を踏み出した瞬間。急に扉が跳ね返ってきて、彼女の顔面にこれまた大きな音を立ててぶつかった。
鼻血出てますよ？　君はドジッ娘でしたか。

「おやおや、大丈夫かね？　ミス・ヴェルロット」

おーおー。威厳の在るじいさんだな。マフィアの親父を思い出すぜ。

「やっと従魔の儀式が終ったのかいの？　して、その従魔は何処に？」

一応、眼の前に変態プレイ風の男がいますよ、じいさん。これを無視しますか。

「こ、これです」

嬢ちゃん、人を指で指しちゃ駄目って教わらなかったのか？　後、人間をコレ扱いしない。俺だって一応人間なんだから。

「おお、珍しいのぅ。人間を呼び出す者は何年ぶりじゃろうなぁ……確か、四百年ぶりかのう」
「おぉうっ！　じいさんが始めてだっ。俺を人扱いしたのは！」

ちょっと感激しちまったじゃねぇか、このじじい。

「そうかい、そうかい。そりゃ周りのものが迷惑掛けてすまんのう」
「や、大丈夫だ。……まぁ、アンタなら話になりそうだしな」

ここが魔法の在る世界だと言うのは、只今体験中だ。だから信じるとしよう。

「ここでは、魔法が在ると言うのは分かった。しかし、何故俺がここにいるのかが分からん」
「答えはいたって簡単じゃ。【偶然】と称されるか【呼んじゃった♪】みたいな物じゃ」

なかなか、お茶目なじいさんじゃネェか。嗚呼、殺りたくなってきたぜ？　や、あえてハーフまでに抑えとくってのも在りだがな。

「こらこら、怖い目をするでない。どの道、もう戻れんのじゃから諦めた方が良いぞ」
「え、えと。学園長、私はどうすればいよいのでしょう？　従魔とは何か特殊な力を持って、主人を助ける物なのですよね？　人間に特殊な力があるとは思えません」

まぁ。経歴なら、それだけで映画が作れそうな俺なんだがな。

「案ずるでない。昔に見た人間の従魔は、半獣化の力で竜を素手で殴り殺し、肉を食っておったからの」

色んな意味でデンジャーだな、おい。
ん？　嬢ちゃんが横で震えてるじゃねぇか。やっぱまだガキか。

「って事は。俺は二度と自分の故郷に帰れないと？」
「そう言う事じゃな。向こうに何か残してきたものでも？」

にやり、と気味悪く笑うじいさんは、まるで俺の素性を知ってるように見えた。

「……ねぇよ、んなもん」

俺の発した「向こうの事は聞くんじゃねぇ」オーラが部屋に蔓延する。

「分かった、仕方ない。その従魔って仕事引き受けてやる。ただし報酬は貰うぜ」

ついつい、仕事を引き受けるような口調で言ってしまった。

「え？　さ、さっきまであんなに嫌がってたのに……後、報酬ってなんですか？」
「なに、こっちで暮らすに不自由しない金と退屈しない程度のスリル、さ」

新しいご主人様……は学園長に目で必死に何かを訴えている。

「ふむ、スリルとな。それはワシ自らが用意してやろうぞ」

そっちは了承したな。……こっちに銃の弾はあるのだろうか？

「おお、お金は私と一緒に生活するので大丈夫だと思いますっ」

よし、契約成立だな。んじゃいつものいっときますか。

俺は、ご主人様の前で片膝を付き、頭を垂れる。

「汝との契約を承る。我が二つ名は「闇色の黒」汝と血の誓約を交わす」

少女はキョトン、としている。当たり前か。

立ち上がった俺は「なに、ただの癖さ」と付け加えた。

「ま、まだこっちの契約が終ってませんよぅ……」

まだあるのか？　なんか色々面倒だな。

今度は逆に、少女が俺の眼の前に立ち、右手を胸に当てながら言い放つ。

「汝と契約を交わす。我が名はエルナ・セルロウ・ヴェルロット。受け入れるなら血を差し出せ」

……小さなナイフを突きつけられた。血を見せろって事か？

俺は指先を軽く切り、滴る血雫を前に突き出した。
更に、今度はエルナが指先を軽く切り、俺の指の切り口に押し当てる。
一瞬紅く光った後、その光は空中に文字を浮かべて消えた。

「終わりか？」
「ハイ、コレで正式な従魔に貴方はなりました」
「スノウ・ベルン中級学校学園長、シャールド・リトマンが見届け人になった。そちらの契約は正しく且つ公平に行われた事を証明する」

じいさん、そんな役割だったのね？

もう、用は無いからといって、ご主人様が部屋を出ようとしたので、俺も付いて行こうと扉を潜った時。
後ろから聞きなれ始めた老人の声が響いた。

「向こうにいる時は、何をしておったのかいの？」

……このじじい。

俺は答えてやることにした。隠しても仕方ない様な気がしたから。

「なに、しがない殺し屋さ」

そう言って扉を潜りきった後で、その部屋からは笑い声が聞こえていたのは誰も知らない。

参話。

嗚呼、空が青いな。
他の生徒の儀式が終るまで、自由時間だそうだ。だから、今は外でブラブラと散歩をしていた。
快晴の中で真っ黒なロングコートを翻した俺は、眼の前を歩く少女に語りかけた。

「なぁ、エルナ。お前、歳いくつなんだ？　見た所、十四、五くらいか」
「私は十五ですよぅ。……あなたはいくつなんですか？」

なんだ、二つ下なのか。
童顔だからもう少し下にも見えるが、何故か育ちに育ちまくっている”ソレ”のせいで、中和されていた。と言うか童顔巨乳はこの世で反則だろ？

「俺は十七だ。年上だな」
「従魔が年上なのは当たり前なのです。精霊や魔獣、聖獣なんかが従魔になるんですから。ところで、名前をまだ伺ってませんでしたよね？」
「ふぅむ、そうか。俺の、名前……か」
「どうかされましたか？」

彼女は振り返って、俺の顔をやんわり笑いながら見つめる。

「名前なんて、ねぇよ。確かフッた女と一緒に捨てたね」
「え、ええ！？　ほほ、本当ですか？」
「嘘だ。名前が無いのは本当だが、彼女がいたのは嘘だ。だからそんな悲しそうな目で俺を見ないでくれ」

とうとう、年下にまで哀れまれちまった。
別に顔は悪くないとは言われる。むしろ、いい方だ。

「そうなんですか。カッコイイのに勿体無いです」

あ、ヤバイ。ちょっと泣きそう。君だけだよ、人生の中でそういう事言ってくれた人は。周りの女は「金、金、金！」だったからなぁ……と、言っても全員危ない仕事の奴等だが。

「ありがとよ。一応二つ名はかなり多いんだが、本名がないんでね」

俺は何故か変な二つ名が多い。例えば、だ。
【死神殺し】やら【二挺一刀】なんかは分かる。
でも、【ふれでぃの孫】とか【じぇいそん君】なんて、もろパクリじゃねぇか。
誰だ、名前付けた奴、出てこぉい！

「じゃ、じゃあ。私が名前付けて良いですか？」

「却下だ」
「え！？　な、なんでですかっ？」
「なんか、ネーミングセンスなさそうだから」

ポチとかタマとかゴルゴッソとかハンヌラバとか。
ドラ〇エに出てきそうな名前を付けられそうな予感がしたから。

「だって、だって。……付けたいんだもん」
「駄目だ、泣き落としには慣れてるんだ。効かねぇからな」

それで、何回騙されて仕事のギャラを巻き上げられたか。
……くそっ、泣き顔可愛いじゃねぇかっ！

「分かった、分かったから。試しに一個言ってみろ」
「うん……カイト」

案外、まともだった。うん、結構悪くない。

「なんだ、結構まともじゃねぇか。名前の意味は？」
「この国の古い言葉で【守護者】って意味があるんですよっ♪」
「守護者、ねぇ……分かった、その名前貰ってやる」

殺し屋が、転じて守護者か。とんだ笑い話だな、畜生。

しかし、初めて貰う名前は妙に心に染み渡った。

「やった、今日から貴方はカイトです♪」
「分かったから、連呼するな。恥ずかしいだろ」

さぁて、俺はこの先どうなるのかねぇ？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5825c/

優しい殺し屋と魔女。

2010年10月11日20時11分発行